

死と再生

——『雨の王ヘンダソン』の円環構造について——

新 美 澄 子

ある日の新聞に次のような記事が載っていた。促成栽培のビニールハウスで暖房のため使用する重油の量が、この二十年間に四倍に達した。ドラム缶にして九百万本の重油が毎年燃やされている。季節はずれの野菜を食べるために何と多くの石油を消費することか。だがこの程度で驚くのはまだ早い。完全に工場だけで野菜を生産する実験がすでに九州のある試験場で行われている。巨大な工場の中では太陽の代わりに人工の光が照射され、冷暖房装置で温度調節が行われる。すべてコンピュータが制御し、作物にとって理想的な環境を人工的にセットできるといふ。レタスやサラダ菜が露地ものの二倍の速さで育つらしい。工場だと計画出荷できるし、病気も少ない。収穫量は安定するうえ、省力化もできる。ただ問題は、野菜までが工業製品のようになれば、そこにはとうぜん、新たな産業廃棄物処理をどうするかという難問が付随してくることだ。

産業廃棄物などに象徴される負（マイナス）のエネルギーをエントロピーと呼ぶことはよく知られている。エントロピーとはわかりやすくいうと自然界の汚れの度合いである。^①自然のなかにあるものは本来的にはすべてエネルギー

的に調和している。これは汚れの度合いが低いつまりエントロピーが低い状態をさす。この調和を崩すものが現れるとエントロピーは高くなる。新聞記事からもわかるように、文明は自然界のバランスを崩すことなしには維持されない。近年環境問題が盛んに討議されたり、エントロピーという言葉が耳にするようになって久しいが、それもこれも、ヒトという生物が、生存に必要以上のものを欲するからである。一個人はともかく国家規模になれば、生産にとまなつて生み出されるエントロピーの量は莫大なものになる。フロンガスの規制をはじめ、いまや先進国は文明の恩恵を享受する一方で、その深刻な弊害の対策に頭を悩まし続けている。

一、ヘンダソンはエントロピーである

『雨の王ヘンダソン』の主人公は、エントロピーの肥大に苦しむ大国アメリカを象徴するような人物である。⁽²⁾ エントロピーが高くなったのは、ヒトが生存に必要以上のエネルギーを消費するためだが、ヘンダソンは体内に溜めこんだエントロピーのために狂気の一步手前まできている。百八十センチの身長、巨大なキノコ頭の彼は、躁と鬱が同時発生する奇病の持ち主で、発散しきれぬ負のエネルギーを持て余し、苛ら苛らはつものばかりだった。それでいて心中にはつねに張り裂けるばかりの悲しみが溢れている。悲嘆と精力という妙な取り合わせに本人すらとまどいがちだが、ふと気がつくと、身体の奥深くで何やら「I want, I want」という得体の知れぬ声がする。一体何がしたいのかと問うても一向に要領を得ない。ただ悩ましいうめき声だけが日毎に強まるばかりだった。

親譲りの資産に囲まれ裕福に暮らす彼が養豚業を始めたのも、もとはといえば体内に溜った毒素をはき出すためである。しかし事業も症状をやわらげてはくれなかった。ますます増大していくエントロピーの吐け口を求めて飲酒、乱暴ろうぜきの限りを尽したあとは、しだいに死の想念の虜囚になる。高まる不安と不満のせいで神経症におちい

た彼は、ピストルで狂った脳天を吹き飛ばそうとする。幸い、心配した家族のおかげで大事には到らなかったものの、鬱病はますますひどくなる一方だった。ついに窮余の一策、祖国に妻子を残し、ひとりアフリカへ旅立つ。それもこれも、内なる「I want, I want」の声にそのかされてのことであつた。

ヘンダソンはアメリカにいる間は、体内にたまつた精神的エントロピーを排拙できなかった。アメリカ自身が、高度エントロピー生産国だからだ。ヘンダソンの悩みは、要するに、体内にたまつた精神的エントロピーを排拙できないための煩悶である。もとはといえば生存に必要以上のエネルギーを消費するからだ。動物のようにきっかり、生存に必要な量のエネルギーしか消費しないのであれば、「I want, I want」などという奇声を発するわけがないし、神経症的症状が起きるはずもない。

ヘンダソンは若い頃から奇妙な倫理的衝動にとりつかれていた。何か世のために善行をしたい、奉仕をしたいという欲求がつよかつた。だがこれも、体内にたまつた精神的エントロピーを何らかの方法で発散させなければという焦燥感から生じたことで、本人は自覚していないが、真性の神経症にならないための自衛策にほかならない。溜つた余剰エネルギーを消費するといっても、発散の行為がさらに高度のエントロピーを産みだしては困るので、他者の利害と合致する奉仕活動は、その点はなほ都合なのである。シュバイツァーの伝記にしばれたり、アフリカくんだりまで遠征したのも、そこに住む「未開人」を「啓蒙」し「救済」せんがためであつた。だがよく考えてみると、この種の善行にはしばしば傲慢さが隠されている。アメリカ大陸に初めて移り住んだ白人は、インディアンを非文明人と見下したのではなかつたか。開拓とか建国といったって、とどのつまりは、自己の内部に鬱積した過剰な負のエネルギー、すなわち精神的エントロピーを発散する必要があつたからにすぎない。白人たちはそれを、理想や正義という錦の御旗とすりかえてきた。その後、独立革命、南北戦争、西部の開拓と続いたが、それでも物足りず、今では毎年何百万というアメリカ人が、世界中に飛び出していく。第二のシュバイツァーたらんと地球の反対側まで出かけたへ

ンダソンもそのひとりである。明らかに作者は、世界の救世主になりたいと欲する（意識的にしろ無意識的にしろ）アメリカの大国主義を、ヘミングウェイ⁽³⁾に偽した主人公の野心に見たてて、痛烈に皮肉っているのだ。

アフリカには到着したものの、ヘンダソンの計画は誤算続きであった。現地の民に「利害を超越した純粋なことをしたい」などと偉そうな口をきいたのはいいが、奉仕どころか、とんでもない失敗をやらかして大迷惑をかける。命の次に大切な貯水池を破壊してしまったときは「はるばるやってきたのに役立たずとは、恥ずかしくてたまらぬ。アフリカの奥地へ人間ひとりを送りこむのに費やした進歩と工夫の莫大な総和に比べ、俺はまるきりの無芸大食⁽⁴⁾」とさすがに氣落ちする。

「おお、悪しきもの、邪悪なるものよ。いったいどうしたらよいのだ？　どのようにしておのが招いた災厄のつぐないをしようか？　ああこの性格がいけないのだ。俺という人間は、手に触れるものは何もかもめっちゃめっちゃにしてしまう。もう元にもどせない。こんな俺だもの、一目で正体を見抜かれてしまうに違いない」⁽⁵⁾

ヘンダソンに限らず、人間のあらゆる無駄な行為は、エントロピー発生に関係がある。生存に直接必要でない行為に使われる余分なエネルギー消費は、すべて自然界のバランスをくずすエントロピーの原因になるからだ。ヘンダソンがアフリカに出かけるために消費したエネルギーの無駄使いは、動植物よりもはるかに余計な手間暇をかける人間の食生活の不自然さ（季節に関係無く野菜を食べたりする不合理）に通じるものがある。人間はなぜ、かくもエネルギーの無駄使いが好きなのだろう。なぜヘンダソンは「I want, I want」という内心の声に脅かされるのか？　つまるところ、人間が、生存に必要な以上のエネルギーを消費せずには生きていけない、自然界の異端児だからである。

二、低度エントロピー国家アーニューイ

ヘンダソンがアフリカに来てもっとも驚いたのは、この大陸にはもはや前人未踏の僻地など残されていないことだった。ついこの間までまったくの未開地だった地域にも近代化の波は押し寄せている。そして近代化とともにエントロピーの肥大現象が徐々にではあるが確実に始まっていた。とくに精神的エントロピーの害毒が彼の目をひいた。現地人のあいだにも深刻なストレスによる神経症的兆候が見られるのには、まったく驚くほかなかった。

人間は物質の生みだすエントロピーのほかに、自己の体内にも精神的なエントロピーを毎日作りだしているやっかいな生き物である。いわゆるストレスと呼ばれるものがそれで、精神的エントロピーの指数がある程度を越すと、その人間はきわめて不安定になる。産業廃棄物の一部など、物質のつくりだすエントロピーは、土のなかのバクテリアや化学反応によって分解され、エントロピーの低い物質に還元されて植物に利用されるが、このようにエントロピーが何らかの方法で低い指数に抑えられていれば問題は起きない。同じ事が人間の精神についてもいえるとすれば、健康を保つためには、適当な方法で体内に溜ったエントロピーを外に吐き出す必要がある。排拙しないでエントロピーを抑圧し続けると、ヘンダソンのように神経症になりやすい。だからエントロピーの指数を低くするために人間は様々な工夫をしている。また未開地などでエントロピーが高くなることもあるのは、とくに異文化との接触によって共同体の内部に価値観の対立が起こったときなどで、価値観の対立の結果、共同幻想に混乱が生じると、住民に神経症的症状が出やすいという。

もっともヘンダソンが最初に訪れたアーニューイ族は内部分裂もなく、蛙や牛に関する迷信のような後進性はあるものの、比較的エントロピーの低い安定した社会を構成していた(迷信深いことは必ずしもエントロピーが高いことを意味しない)。アーニューイは過去三十年というものの白人が訪れたことはなく、久しぶりに見る文明人のヘンダソンを

物珍らしそうに見つめる。王子のイテロは、亡き兄と近代都市へ留学したことのあるインテリで、唯一人英語がしゃべれる。しかし彼以外の民は、アメリカなど聞いたこともない無学な連中ばかりだった。海外経験があるわりにはイテロは保守的で大人しく、アーニユイ全体がのんびりした社会である。ここでは革命や文明開化のような大事業は当分起きそうになかった。

アーニユイの最高権力者は、イテロの母で、老女王のウィラテールである。彼女は低度エントロピー社会を代表する存在だった。なぜなら民がこぞって干ばつのために苦しみ、死んだ牛のことで悲嘆にくれているというのに、この年寄りだけはのどかに悠然としている（ヘンダソンが到着したとき、アーニユイは長く続く干ばつに苦しんでいた）。女王の第一印象は、太った焦げ茶色の身体に真っ白の頭、目がそこのいかにも田舎ばあさんという感じだった。ライオンの毛皮を背中にまとい、太った腹の上で両端を結んだ滑稽な姿で現れた彼女は、終始にこやかに笑いながらヘンダソンを迎える。女王というだけに、さすがにどことなく威厳があるとヘンダソンが感じしていると、突然彼の手をとって、大きくたれさがった土色の乳房の間に押し入れてしまった。さらに、面くらっているヘンダソンの頭をつかみ、下のほうにずらしていき、彼女のたっぷり豊かな茶色のお腹にキスをしろと催促する。

彼女はこの土地では *British*、つまり生と死、男と女の違いを超越する、一種、神格化された存在であるらしい。ヘンダソンの基準では、ピターは *Boon*、「在ること派」の典型だった。「この世には、ただ在ることに満足を見いだす人間がいる。たとえばホイットマンみたいな人」。^⑥「在ること派」とは、生きる意味をすで見いだした人であり、努力奮闘する必要のなくなった幸福な人々のことである。「一方、ヘンダソンを始めとする「成ること派」*Boonae*はそうはいかない。「在ること派」のように、ただ存在するだけで満足できない彼らは（ヘンダソンはその最たるもの）いつも何かにおびえ、何かに餓えている。彼らはしょっちゅう弁解ばかりしている。だがよく考えてみると、ヘンダソンのこの分類は正確ではない。なぜならすべての人間は、大なり小なり「成ること派」だからだ。純粹の「在るこ

と派」なんて、仙人か赤ん坊でもないかぎり、いるはずもない。だからヘンダソンは大きな誤解をしていることになる。すべての人間は「成ること派」であり、「成ること派」であることを運命づけられているといってもいいのだ。

女王ウィラテールは、ヘンダソンには *Grun tu moluni* (グラン・チュ・モラニ) があるという。これは、生きる意志とか、生きようと欲する強い意欲を表す言葉で、進取の気性があるというほどの意味に解せよう。動機はきまってる真剣なのだが、いつもどこかでへまをするヘンダソンにとっては、最大級の賛辞といってよい。まして彼が敬愛する、善良さがおのずと発散しているような老女王の褒め言葉に、彼は大いに感激する。しかし有頂天になったのもつかの間、ヘンダソンはまたしてもおせっかいなアメリカ人気質がでてしまい「ぼくのモラニはぼくひとりのものではない。みんなのためのものだ」などと口走って、頼まれもしないのに、災厄解決にひと肌脱ぐと約束してしまう。アーニューイの天災である干ばつに対しては、誰も打つ手がない。日に日に事態は深刻になっていく。そこで蛙退治(蛙の住む池の水は不浄で飲めないという迷信がある)を買ってでたのはいいが、結局、アーニューイ人にとって命の次に貴重な貯水池をダイナマイトで破壊してしまう。このようにヘンダソンという人間は、手に触れるものを何でもだめにしてしまう。親切も裏目に出て、ついにアーニューイ族は放浪する羽目になる。

ヘンダソンの行く先々で様々な怪事件が起こる。次に訪れたワリリの部落では、雨乞いの儀式に参加して重い偶像を持ちあげたばかりに雨の王 *Sango* にまつりあげられる。王殺害をカモフラージュするモック・キング(偽王)に利用されたとは、彼は知る由もなかった。ヘンダソンには、遍歴しながら出会う世界をつぎつぎに刺激し、活性化していくトリックスターの要素がある。おちよくられることで笑いを引き出すシュレミールのように、弱さを売り物にするのではなく、手を出すたびに大騒ぎを引き起こす突撃型の道化・ヘンダソン。

トリックスターについて、文化人類学者のポール・ラディンと作家、大江健三郎は次のように定義している。

「トリックスターは創造者であつて破壊者、贈与者であつて反対者、他をだまし、自分がだまされる人物である。彼は意識的には何も欲していない。抑えつけることのできぬ衝動からのように、彼はつねにやむなく振る舞っている」
(ラディン?)。

「トリックスターは、その冒険の成功や失敗のたびごとに、世界の固定した部分を揺り動かし、その意味を更新し、人々に新しい知恵を与える。かれの通り過ぎたところではどこでも、世界は次つぎに新しい様相をあらわす」(大江?)。

ただヘンダソンはアーニューイ族にもワリリ族にも働きかけはしても、ついにその根底をゆり動かすような革命的なインパクトは与えずに終る。だから、肝心なところでドジを踏む彼は、正確にはトリックスターというよりは、むしろドン・キホーテに近いといふべきかもしれない。また、殺された王の身代わりとして雨王サンゴの称号を与えられる彼は、殺されるターフと同じく、スケープゴートの象徴性を帯びている。⁽⁹⁾

三、高度エントロピー国家ワリリ

ヘンダソンは蛙を退治しようとして失敗し、アーニューイの救世主になりそこねたあと、ワリリ族の部落にたどりついた。ワリリは近代国家に匹敵するような高度のエントロピーを抱えこんだ社会であつた。共同幻想に分裂が生じていて、ひそかにクーデター計画が進行中なのだ。もともとヘンダソンは、アフリカの未開地方を訪ねたかったのだが、そんな地域はもうほとんど残っていない。近代的な政府が次つぎとできて、知識階級もしだいに数を増している。ワリリの王子は医学博士をめざすインテリだつた。土人のプリンスにしろ無教育というのはまれで、王は世界を知る必要があるといふので、すでに何代も前から近代化された地域へ留学する習慣がある。

そもそもアーニューイ同様、昔は低度エントロピー社会であったワリリが、なぜ高度エントロピー社会になったかというところ、前述したように異文化、つまりヨーロッパ型先進諸国との接触が原因^⑩している。アーニューイもワリリもこの三十年ほど白人と接触したことがなく、どちらもほとんど鎖国の状態が続いていた。しかし、一般の民には異質文化に触れる機会はなくとも、為政者すなわち王や側近は、代々、ダーフと伯父のホーコがそうであったように、留学を通して、異文化と接しているのである。近代になって異国文化と接した発展途上の社会に、文明の落とし子ともいべき高度エントロピーが発生するようになった。これは、ヘンダソンの予想できなかった現実である。

アーニューイは内部分裂もなく、比較的エントロピーが低く安定している。だが、ウィラテールという聖女がいるかと思えば、一方で蛙を恐れるなど、その発展にはむらがある。この後進国は外部からの刺激に対してもきわめて鈍感で、ヘンダソンの出現によっても何ら本質的な変化は遂げない。アーニューイには歴史を超越した古さが感じられるとヘンダソンはいう。古代社会が一時期持っていた安定した社会構造と、共同幻想の乱れの少なさがそのような印象を与えるのだろう。アーニューイに比べると、ワリリはずっと複雑で、ダーフという若い王と、王を亡きものにしようとする反体制側との対立が激化していた。集団内の共同幻想が均質さを失い、混乱が生じている。共同幻想にゆさぶりをかけている首謀者は、驚いたことに、主権者たる若き王である。王はワリリの近代化をめざし、宗教の大改革を考えていた。しかし王には本当に味方となる人間が一人もいなかった。四面楚歌のなかで孤軍奮闘するこの若き王に、しだいにヘンダソンは惹かれていく。

四、王殺しの伝説とその円環構造

未開の土地にはさまざまな迷信が残っていて、アーニューイ族は牛を聖別しているから、殺さないのはもちろん、牛

の健康状態をひどく気にする。一方、ワリリでは王の生まれ代わりとされる一匹を除き、他の全てのライオンは邪悪だとして忌み嫌う習慣がある。聖別されたライオン以外は捕らえることも飼うことも違法で、ワリリの妖婆は性悪なライオンと交わりをすると思はれていた。ところでこのワリリ、平和を好むアーニユイと違って、人間を殺すことを何とも思わぬきわめて野蛮な種族である。ここでは死刑は日常茶飯事なのだ。広場にある刑場には逆さぶりの死人がたくさんぶらさがっている。死刑執行の命令を出すのもっぱら僧侶階級で、その頂点にビユナムという大僧正がいる。犯罪者はもちろんのこと、雨乞いの儀式で偶像を持ち上げられなかった大男まで、無慈悲に殺される運命だった。そればかりか、後継者を作れぬ不能の王および王の妻は即刻、議会に報告され、やがて絞殺される。ハイエナのように犠牲者を探しまわる僧侶階級が、手ぐすね引いて待ちうける次の犠牲者は、国王のダーフだった。ワリリには、君主として役目を果たせぬ王は処刑しても良いという恐ろしい伝統があるのだ。ビユナムは王の伯父であるホーコと手を組み、ダーフの失脚をねらっている。

ワリリの伝統では、王が年をとると、僧侶たちがジャングルへ運びこんで絞殺する。遺体にわいたウジを民衆に見せ、亡き王の生まれ代りだと宣言したのち、僧侶はまたジャングルに入つて、こんどは由緒正しいライオンの子をつれてくる。幼い獣はしばらくすると再びジャングルに戻される。そうこうするうち新しい王が擁立されるが、新王は一、二年のあいだに、成長した王家のライオンを捕まえないければならない。ライオンを捕まえて初めて、王権が確立されるという仕組みだった。

先王が死んだとき、息子のダーフは学業を中途で放棄して帰省し、王の後継者になった。しかし肝心のライオンを捕まえる義務をまだ果たしていない。だから王といつても、ダーフには仮免の王権しかなかった。ジャングルに入つて捕えたのはアッテイという雌のライオンで、これは接触を禁じられている凶兆のライオンである。ダーフは周囲の反対を押し切つて、この雌のライオンを王宮で飼い始めた。外国に暮らし異文化に接したダーフは、ワリリの共同幻

想であるライオンのタブーを自ら破ることによって、宗教改革を行おうと考えていた。その結果、ダーフは掟を破った罪を問われ、ビュナムとホーコは政權奪還を図る。ワリリに高度のエントロピーが生ずるようになったそもその発端は、こうした内部の政權抗争が引き金になっていた。

フレイザーによると、一般にアフリカの伝統文化においては王は老衰するか、重病にかかるかすると、自殺するか殺されるかする慣行または伝説が存在したらしい。^⑪ なかには老衰、病氣といった人間にとって不可避の原因以外によっても「王殺し」が行われたという。その場合には、王の「犯罪」が問題にされたのである。ダーフがライオンのタブーを破ったのちに、凶作がつづき、悪疫が部族じゅうにはびこると、僧侶階級はいっせいに民を扇動して王を告発した。

こうした王權交替の騒動は、古典なかでも歴史悲劇にしばしば見られる円環の周期を描いている。たとえばシェイクスピアの史劇は、必ず王位をめざす闘争で始まり、結末は必ず、古い王の死と新しい王の即位で終わる。^⑫ 支配者は過去の罪の長い鎖をひきずつている。彼は、自分の後を継ぐかもしれない人間や、自分の王冠を狙う人間をつぎつぎに処刑する。だが彼は王權をおびやかす人間を一人のこらず処刑できるはずもない。やがて若い王子（殺された者の息子か、孫か、あるいは弟）が追放した地から帰ってくると、退けられていた貴族たちが彼の周りに集まってくる。

王の罪は、王權の聖性とは裏腹に、しばしばその非日常性のゆえに、原罪のイメージを伴う（旧約のダビデ王が犯した姦淫と殺人の罪は、なぜその直後に起きた不幸と結び付けられなければならないのか）。もちろん戦国の武將が周囲の敵を皆殺しにするというような例には、エディプス王がそれと知らずに父ライオスを殺したような異常性は認められないかもしれない。だが王が自己の非人間性によって、人倫の道にもとる行為を犯すという意味では同次元に位置する。未開地の王權にまつわるこのような非日常性について、山口昌男は次のように説明している。

一、王權は非日常的な意識の媒体として働く。二、文化の外延を破ることによって王は「自然」（人間の内なる自

然であつて物理的自然ではない。人間の獸性みたいなもの）に秘められたエネルギーを己のものとする。三、しかしそれは同時に日常的な意識に対する脅威を構成する。王権はそれ故つねにその基底に反倫理性を持つ。四、王権にまつわる罪の状況は日常生活において堆積される生活への脅威を王権に転移させることを可能にする。いわば、日常生活における災厄を王権の罪の状況と結びつけることによって、災厄を追い払う役割を王権に負わせることを可能にする。⁽¹³⁾

これらの諸点は、王権がいかなる条件において聖なるものと意識されるかということ、および王権のもつ両義的な性格を考えるヒントを与えてくれる。しかし聖なるものが可能になるために、なぜ王権のパターンは罪の状況を前提としなければならないのかという疑問は依然として残っている。その答えはこうである。平民ではなく「王」が殺されることによって、共同体のかかえるエントロピーの「もっとも効率のよい」還元作用が行われるためである。王権を担うものは罪を出発点において背負い、住民の汚れを一身に引き受けることにより、これを権威に転化していく。そして王の権威が頂点に達したとき、彼は加速度的に非人間的なもの、つまり神の状態に近づく。王の生活が一般にフレイザーの述べたごとく、タブーに囲まれたかのごとき印象を与えるのはそのためであると山口は指摘する。また、ダーフが正式の王になるまでに、ライオンを媒介にしてさまざまな段階を経なければならぬように、王の進級すなわち新しいタイトル（称号）を数年間隔で与える儀礼が、多くの社会で実際に行われるという。

ところで、神聖視される王も人の子、肉体は有限ゆえに、やがて周囲に彼の凋落への期待が始まる。凋落が急激であるほど、王権の悲劇的イメージは強烈なものとなる。そして王が気がついたときには、伯父のホーコやビユナムのような、王位の請求者が背後に迫っているのである。彼は王位を追われる身となる。

フレイザーの記録には、実際ワリリとよく似た話がでてくる。Suluk という部族には二十世紀まで王殺しの習慣

が生きていた。⁽¹⁴⁾ 神格化された王は尊敬されてはいるが、いったんその生殖能力が疑われると（多くの妻たちが高官に報告する）、昼寝をしている最中に、顔と膝を覆うような一枚の大きい白布がかぶされ、それが死刑宣告の徴しとみなされた。初めは、そのために特別に造られた草ぶきの小屋で餓死させる方法をとったが、日数がかかりすぎることから、のちには絞殺するようになったらしい。『金枝篇』にあるように、実際、アフリカの多くの社会では、王の精力と豊穣には密接な関係があると信じられてきた。ペローがフレイザーを読み、ヒントを得たということは十分に考えられることである。このようにワリリの「王殺し」の習慣は、死と再生といった神話的モチーフに彩られている。死が生と隣り合わせに表現される王殺しの行事は、西洋のカーニヴァルにおける「偽王（モック・キング）の戴冠と王位剥奪」の伝統を思いださせる。バフチンは「カーニヴァルは万物の消滅と再生を司る時間の祝祭である」と述べ、モック・キングの習俗の基礎に、カーニヴァルの世界のコアである転換と交替、死と再生のバトスを読みとろうとした。

「戴冠＝剥奪とは転換・再生の不可避性と同時に創造性を現し、あらゆる体制と秩序、権力とヒエラルキーの陽気な相対性の表現である裏返しにされた儀式である。戴冠にはすでに来るべき剥奪のイデオが含まれていて、それは最初から背反的なのである」。⁽¹⁵⁾

モック・キングの行事は、世界の汚れを王権に引き受けさせようという儀礼的期待を象徴したものである。すなわち「年ごとの祭りに、奴隸や捕虜を王に仕立てて、住民は臣下としての礼を尽くしながら同時になぶりものにして悪態をつき、場合によっては汚れを一身に引き受けさせて儀礼的に殺してしまうという慣習」⁽¹⁶⁾は、アフリカの多くの社会で、王権に必然に伴う反作用として「王殺し」という形で制度化されたものを、受け継いだ行事に他ならない。人

類学を専攻したペローは、こうした神話的枠組みにおいて反復される王権の悲劇性については、多くのことを知っていたに違いない。

ワリリの王位剥奪も、非日常的な祝祭的時間のなかで行われる。日常的な生活の繰り返しだけでは人は窒息し、社会は活力を失ってしまうからである。だから共同体活性化のためには、どこかで日常性をひっくりかえす瞬間を作らなければならない。つまり祝祭は社会なり共同体なりの活力を回復させるためにあるのだ。祝祭的な時間においては、日常の秩序が逆転される。部族全体を統率する王が殺されて、ライオンに生まれ変わるというのも、秩序の転倒によって共同体を蘇生させようとする神話的仕掛けがそこには働いているのである。

五、ダーフ王の宗教改革

ダーフはライオンを愛するあまり、ライオンを魔物扱いする風習を迷信としてしりぞけ、ワリリの宗教改革を断行する。ライオンに関する禁止条項（タブー）は、実は無知な民衆をまどわし、恐怖政治を執行することによって、権力を握ろうとするビュナムたち僧侶階級による陰謀であった。ビュナムたちは、災厄は、ダーフと雌ライオンが王宮で魔術にふけるせいだと言いつらしていた。前生で雌ライオンの敵だった女たちが流産し、干ばつが始まっている。それもこれもみな雌ライオンをかばうダーフのせいである。魔女の霊が乗り移ったライオンは、ダーフを誘惑して、王位継承に不可欠な、正統の雄ライオンを捕まえる義務を果たさせないと彼らは非難する。

腹黒い僧侶たちを追放するためには、徹底した宗教改革が必要だとダーフは考えた。改革の第一歩は、呪術に関する迷信を払拭することである。迷信を除去するためには、民衆の恐怖心をなんとかしなければならぬ。そのために必要なものは想像力の訓練であると、ダーフは奇想天外な「ライオン療法」なる、一種の神秘主義的精神療法を提唱

する。想像力を正しく訓練することによって神経症を癒すことができるばかりか、人格の向上も実現するというのである。「ライオン療法」と名づけた訳は、ライオンの習性を模倣することによって、人間を改造する方法だからである。「恐怖こそ人類の支配者です」というダーフは、ヘンダソンにも、この想像力の訓練法を強要する。

ダーフは精神と肉体のあいだにつながりがあると信じていた。いっさいの現象は脳から始まっている。病氣も、性格も、運命ですら、人間の頭脳、すなわち想像力のなせるわざである。人間の想像力は偉大なことをするのであって、想像力こそは真に偉大な模倣者であり芸術家である。昔、人は飛ぶ鳥を見て、自分も鳥のように飛んでみたいと想像しているうちに、飛行機を発明した。想像力によって実在を変えられるのだから、われわれは抑圧している想像力をもっと解放すべきで、ライオンの真似をするのも、眠っている想像力を目覚めさせ、鍛えるためにはかならない。

ひたすらライオンに似ることに熱中する王は、よつんばいになったり、寝そべったり、かと思ふとものすごいスピードで走ったり、昼夜の別なく獣らしいしぐさを真似しようと奮闘を重ねる。模倣によってライオンが持っている優れた資質やエネルギーを吸収し、その結果、こちらの姿体も強く優美に改善するつもりらしい。最終的には死の恐怖すら克服できるというが、ヘンダソンは半信半疑だった。「靈魂の不滅を信じますか」とヘンダソンに訊くダーフ。自律訓練法にかける彼の情熱は一向に鎮まらない。世界は要素の寄せ集めではなく、各部分が全体の一器官であると固く信じるダーフは、想像力が枯渇したために、恐怖と欲望をただ繰り返すだけの人類をなんとかして救済したいと熱く語る。

宇宙の森羅万象が表面的な断絶を越えてたがいに関連し合うものであるというダーフの思想は、さまざまな呪術がまだ生きている未開地の伝統や習俗からヒントを得たものに違いない。だがこれは、科学的に実証できるものとのみ価値を認めようとする近代人にとっては、はなはだ受入れ難いヴィジョンである。しかしラヴジョイ⁽¹⁷⁾などをはじめと

して、西欧の思想史の底流として、このような立場は時代を越えて観察される。ネオ・プラトニズムと後に呼ばれることになるこのような思想は、宇宙的交感と自然呪術という、ルネサンス期のカーニヴァル的な民衆神学に通じている。その特色は、すべての分け隔てられたものの偽りの境界を消滅させ、万物のなかに内包されている互いに呼応しあうエネルギーを目ざめさせるところにある。「精神は万智の存在とつながっている。宇宙の神秘を知ることは想像力を通してのみ可能なのだ」⁽¹⁸⁾。このような汎神論は、ペローがしばしば言及するライヒの思想や、シュタイナーをはじめとする神秘主義的な思想家たちの宇宙観と共通するところが多い。後期の『フンボルトの贈り物』では、ライヒやシュタイナーの影響はもっと顕著に認められるが、『雨の王ヘンダソン』でも、すでに関係は充分に跡づけられる。ダーフがヘンダソンにもっとも重要なこととして強調したのは、人間が意のままに自らを無限に変身させることができるという点であった。人間はどのような形態にも押し込められたりしない存在、すなわちどのような形にも入り込む力を備えている存在なのだ。

もっともダーフの神秘主義は、作品全体の喜劇的調子から判断すると、現代社会の風刺といえないこともない。たとえば「想像したとおりに人間は変わる」というキャッチフレーズで売りだされている「イメージ・トレーニング」のような、アメリカで一時流行した民間心理療法のパロディと解釈することも可能だろう。

六、クーデター

ダーフはワリリの伝統にしたがって、十三才で留学のためラミュの町へ伯父のホーコとともに移り住んだ。ところが転地してまもなく、アーニユイのプリンス、イテロを誘いだし、放浪の旅に出てしまう。王子の身元保証人としてラミュに一人残された伯父のホーコはあわてた。出奔した二人の王子たちは、マリンダイから南部のサンジバールへ、

さらに水夫となってインド、ジャバ、紅海、スエズへと渡り、シリアでは五年間ミッションスクールに通う。放浪の体験がダーフ王に、因習を打ち破ろうとする改革の思想を植えたのは確かであろう。

ところで、新しい文化に接し、その影響を受けたのはダーフひとりではなかった。放浪の旅にでた王子の帰りをひたすら待ちわびていた伯父のホーコも、異文化にふれることによって目がひらかれ、ラミユでの自由な生活は、彼の意識の深層に眠っていた政權奪還への野心を呼び覚ました。ラミユは最新式の町で、自動車もカフェも音楽もあり、英語、フランス語、ポルトガル語など数か国語が使われている。召し使いや女たちに囲まれた楽しい日々を送るうち、ホーコはすっかり都市型文化が気に入り、ワリリに帰ったあとも、ひたすらラミユの町をなつかしむ。

近代化された都市文明に触れたダーフとホーコは、ともに異文化との接触によって、ヴィジョンの修正を余儀なくされた。ふたりは後進国ワリリに帰ってから、まったく異なる二つの道を歩みだす。ダーフは宗教改革を思いつき、ホーコはビュナムらと組んでクーデターを密かに計画し始める。表面上はタブーを犯した王に改心を迫るという体裁をとりながら、ホーコたちは、実はすでにライオン・魔女伝説など、とうに信じなくなっていた。それは、ヘンダソンの肝だめしのために死体を選び入れたり、迷信ぶかいダーフの母親に、ライオンのミイラを送りつけ、おどした手口から明らかである。民衆とは違い、彼らはライオンのたたりなど恐れていないのだ。ヨーロッパの学問を学ばなくとも、タブーの不合理性にはとくに気がついてるのである。しかし、彼らにとって、無知もうまいな民衆を操り、王が邪悪なライオンを飼ったために災厄が起きたと信じさせることは、どうしても必要だった。迷信ぶかい民の恐怖心を利用することによって、王権の転覆ができると考えたからである。

ダーフは、結局ビュナムたちに負けてしまう。多勢に無勢では勝てるわけがない。孤高のダーフ王はヘンダソンには魅力があったかもしれないが、悲劇は、彼がワリリではアウトサイダーであったことから起きた。人間の想像力を

開発することによって人類を救済しようとしたダーフは、修業の途中で、敵の策略にかかり、あつてなく殺されてしまう。狭い肉体を超えて、宇宙に満ちる生命のエネルギーと交感し合おうとした彼の遠大な理想からすれば、皮肉な結果には違いない。しかし不思議なことに、ライオニズムの万能性は証明されなかったにもかかわらず、ダーフは彼の人格的な魅力でヘンダソンの心を捕らえ、後者の内面をすっかり変えてしまう。後者はあれほど苦しめられた神経症を解決して、ビュナムとホーコに復讐し、新しい決意を持ってアメリカという巨大文明社会にまた戻っていく。

ヘンダソンはついにアーニユイの女王ウィラテールから授かったあの謎のような言葉「グラン・テュ・モラニ」(人間は生きたい)の意味を悟る。そしてそれが究極には「愛」という、古くて新しいテーマに集約される事を確認するところで物語は終わっている。ダーフの影響を受けたヘンダソンは「僕の内には宇宙がある」ことを理解し始める。それは近代まで主流であった、絶対的真理はつねに人間には達することのできない「外部」に存在すると説いてきた、西洋の合理主義とは対立する世界観である。むしろそれは、古代以来の神秘主義が伝承してきた「個の中に全体がある、個体の中に宇宙がある」というルネッサンス時代の民衆の神学に近い。ルネッサンス期に人々を捉えた宇宙観は、小宇宙としての人間の無限の可能性であり、万物と呼応しあう交感の原理であった。ダーフ(『ペロ』)に影響を与えたライビやシュタイナーの系譜も、ルネッサンス期のそのあたりまで遡れるのかもしれない。

しかしこの作品でもっとも重要なのは、ダーフの説く神秘思想ではない。むしろ、人間を恐怖と欲望の虜囚から解放しようとしたダーフという理想主義者と、彼に惚れこんだヘンダソンという八方破れの冒険家の友情を描くことに、作者のねらいはあった。この小説は前半と後半では人物の比重が異なり、前半ではエントロビーを象徴するヘンダソンが強調され、後半ではむしろダーフの存在感のほうが大きい。物語の結末は、一見したところ、生命賛歌の楽天主義一色のようにも受けとれるが、ダーフの理想主義がビュナムたちの現実勢力に完敗するなど、例によって、作者は多様な解釈の可能性を残している。作品が成功したのは、文明批判だけに力点を置かず、自然界のバランスを自ら破

壊しながら、なお愛という生存に直接必要でない余計なものにこだわり続ける、ヒトという生物界の異端児を、憐れみとユーモアをこめて描き得た作者の人間観に拠るところが大きい。

注

- (1) 栗本慎一郎『幻想としての経済』、青土社、一九八〇年、三十八頁
- (2) Eusebio L. Rodrigues, *Quest for the Human*, Bucknell Uni. Press 1981, pp. 114-115. 著者 L. H. Goldman, *Saul Bellow's Moral Vision: A Critical Study of the Jewish Experience*, Irvington, 1983, pp. 86-88. 『The Wandering』は、ヘローの長編のうちで主人公がユダヤ人でない唯一の例外である。主人公のアイデンティティをめぐるゴールドマンの分析は優れている。だが彼は最終的な結論として、純粹に喜劇的な世界を構築するためには、暗い歴史をひきずるユダヤ的背景を一扫する必要があったからだとしているが、説明があまりに一面的すぎる。結局、主人公はなぜ WASP のエリートなのか？ という疑問は依然として残されたまま。本稿ではその問題は主題からそれるので、単に、主人公は、ポスト産業化時代のアメリカを象徴する人物だからという説明にとどめておいた。
- (3) Keith Opdah, *The Novels of Saul Bellow: An Introduction*, Pennsylvania State Uni. 1967, pp. 124-126. ヘンタニンとはキングウェイ型コード・ヒーローのパロディだという指摘は卓見。ヘローは『キングウェイ』を小説家としては余り高く評価しないが、その生涯には大いに興味をそられたらしい (Writers at Work, 1967 のインタビュー参照)。
- (4) Saul Bellow, *Henderson the Rain King*, Viking, 1959, p. 77. 拙訳による。以上同。
- (5) *Ibid.* p. 49.
- (6) *Ibid.* p. 160.
- (7) ポール・ラティン、皆河訳『トリックスター』、晶文社、一九八五年、九頁
- (8) 大江健三郎『新しい文学のために』、岩波書店、一九八八年、一四一頁
- (9) John Jacob Clayton, *Saul Bellow: In Defense of Man*, 2nd ed., Indiana Uni. Press, 1979, pp. 166.
- (10) Jonathan Wilson, *On Bellow's Planet*, Associated Uni. Press, 1985, p. 120. ヘローの人物にはちぐちぐと

なくユダヤ的体臭が、また彼の描くアフリカには、シカゴやニューヨークのイメージが亡霊のようにつきまとっている。一方、頻繁に登場するシカゴには、南アメリカの山奥の田舎町のような奇妙な異国情緒がある。それほどペローの小説空間は、(ノリスやドライサーなど他のシカゴ派と違い)、シンボリックである。

- (11) Howard M. Harper, Jr., *Desperate Faith: A Study of Bellow, Salinger, Mailer, Baldwin, and Updike*, The Uni. of North Carolina Press, 1967, p. 44-46. ハーパーによるとワリリの「王殺し」にはモデルがあるという。彼はフレイザーの『金枝篇』に出自を求める。部族名は異なるが、まったく似たような例を山口昌男が紹介している。西アフリカ・ナイジェリアのヨルバ族においては、王が臣下の助言を受けつけなくなると、評議会は王に鸚鵡の卵を送る。これは王の治世が終わったという評議会の意見の象徴的表現であり、これを受け取ると、王は王妃に自らの首をくくらせて自殺しなければならなかった。(山口昌男『新編人類学的思考』、筑摩書房、一九八五年、二一四頁)

- (12) ヤン・コット、蜂谷・享志訳『シェイクスピアはわれらの同時代人』白水社、一九六八年、十六頁

- (13) 『新編人類学的思考』、二一四頁

- (14) *Desperate Faith*, pp. 45-45.

- (15) M・ハフチン、新谷訳『ドストエフスキイ論』、冬樹社、一九六一年、一八六頁

- (16) 『新編人類学的思考』、二一四頁

- (17) A・O・ラヴジョイ、内藤訳『存在の大きいなる連鎖』、晶文社、一九八五年、六五頁

- (18) *Henderson the Rain King*, p. 269.

- (19) *Desperate Faith*, p. 46. G・スターンの論文(Richard G. Stern, "Henderson's Bellow" *Kernon Review*, XXI, 1959, pp. 655-661)に言及している。「雨の王(ペンダソン)執筆時、ペローに会ったスターンは、ライヒの影響について直接、ペローに確かめたという。